

母たち

小林多喜二

青空文庫

弟が面会に行くとき、今度の事件のことをお前に知らせるようにと云つてやった。

差入のことや家のことや色々なことを云つた後で、弟は片方の眼だけを何べんもパチ／＼させながら、「故里くにの方はとても吹雪ふぶいているんだつて。」と云つた。するとお前は、「そうだろうな、十二月だもの。——こつちの冬はそれに比べると、故里の春先きのようなものだ。」と云つたそうだね。弟は困こまつて、又何べんも片方の眼だけをパチ／＼させて、「故里の方はとても嵐だつて！」と繰り返したところが、お前が編笠あみがさをいじりながら、突然奇妙な顔をして、「お前片方の眼どうした？　神経痛にでもなつた

のか？」と云ったので、弟は吹き出すわけにも行かず、そうだとも云えず、とても困ったそうだ。——その手紙を弟から貰^{もら}つて、こつちでは皆涙を出して笑つたの。

ところが、本当に今年のこつちの冬というのは十何年振りかの厳寒で、金物の表にはキラ／＼と霜が結晶して、手袋をはかなくてつかむと、指の皮をむいてしまふし、朝起きてみると蒲団^{ふとん}の息のかゝつたところ一面が真白にガバ／＼に凍えている、夜中に静かになると、突然ビリン、ビリンともものわれる音がする、家をすっかり閉め切つて、ストーヴをドシ／＼燃しても、暑いのはストーヴに向いている身体の前の方だけで、後半方は冷え冷えとするのだ。窓硝子^{ガラス}は部厚に花模様が結晶して、外は少しも見えなく

なつた。外を歩くと、雪道が硝子の面よりも堅く平らに凍えて、ギユン／＼と何かものでもこわれるような音をたてる……。所^{いわゆ}謂^る「十二月一日事件」の夜明頃などは、空気までそのまゝの形で凍えていたような「しばれ」だったよ。

あの「ガラ／＼」の山崎のお母さんでさえ、引張られて行く自分の息子よりも、こんな日の朝まだ夜も明けないうちに、職務とは云え、（それも「敵方の」職務だが）やって来て、家宅搜索をするのに、すぐ指先がかじかんで、一寸やっては顎^{あご}の下に入れて暖めているのを見るに見兼ねて、「え糞^{くそ}ツ！」という気になり、ストーヴをたきつけてやったと云っている。

監獄^{なにか}にいるお前に「お守り」を送ることをするようなお前の母

は、冬がくると（この寒い冬なのに）家中のものに、二枚の蒲団を一枚にさせ、厚い蒲団を薄い蒲団にさせた。なかにいるお前のことを考えてのことなのだ。それでも、母が安心していることは、こつちの冬に二十何年も慣れたお前は、キットそこなら呑気のんきになれるだろうと考えているからだ。前の手紙を見ると、お前はそこで毎朝六時に「冷水摩擦」をやっていると書いていたが、こつちでそんな時間に、そんなことをしたら、そのまゝ冷蔵庫に入った鮭さけのようにコチコチになってしまうよ。

家うちへ来たのは朝の五時。やっぱり妹が一番先きに眼をさましたの。そして母を揺り起した。母が眼をさますと、何だかと訊きいたので、「ケイサツ」と云うと、母はしばらく黙っていたが、「兄

が東京で入っているんだも、モウ何ンも用事ねえでないか？」と云った。妹はそれにどう返事をしていゝか分らなかつた。

母はブツ／＼云いながら、それでもお前が「四・一六」に踏み込まれたときとはちがつて、平気で表の戸を開けに行つた。それは女ばかりの家で、母にはお前のことだけのぞけば、あとはちつとも心配することが無いからである。戸が開くと、一番先きに顔を出したスパイが、妹の名を云つて、いるかときいた。そのスパイは前から顔なじみだつた。母は「いるよ。」と、当り前で云つてから、「あれがどうしたのかね？」と問うた。スパイはそれには何も云わずに、「いるんだね」と念を押して、上がり込んできた。

明け方の寒さで、どの特高の外がいとう套も粉を吹いたように真白になり、ガバ／＼と凍えた靴をぬぐのに、皆はすっかり手間どった。——お前の妹は起き上がると、落付いて身仕度をした。何時もズロースなんかはいたことがないのに、押入れの奥まったところから、それも二枚取り出してきて、キチンと重ねてはいた。それから財布のなかを調べて懐ふところに入れ、チリ紙とタオルを枕もとに置いた。そういう動作をしているお前の妹の顔は、お前が笑うような形容詞を使うことになるが、紙のように蒼そうはく白だった。しかし、それは本当にしつかりした、もの確かな動作だったよ。特高が入ってきて、妹を見ると、「よう！」と云った。妹は唇のホンの隅だけを動かして、冷い表情をかえしたきりだった。妹と特高のそ

の様子を見た母の顔は急に変わった。そして、口のあたりをモグノ
と動かした。が、何故か周章あわて、両手で、自分の口を抑えた。

妹はその母をチラツと見ると、横を向いた。——その朝、この年
とつた母は何んにも云わなかった。たゞ、「寒くないか？」と云
つたこと、愈いよいよ々連れて行かれるときに、妹の顔を見て、「あ
——あ、お前もか！」と云つたきりだった。

母はこの前の、お前の時のように、今度は泣かなかつたよ。だ
が、母はおそろしく無口になってしまった。誰か何かをしやべつ
ても、たゞ相手の顔を見るだけで、口をきかないの。そして、そ
うでなくても小さい母は、モット小さくなつてしまった。

山崎の「ガラ／＼のお母さん」のところへ行つたのも、やはり

同じ時間だったそうである。このガラガラのお母さんは、前からその朝来ることが、分っていたかのようには、「それ、秀夫や、来たど！ 起きるんだ。」と云つて、息子を揺り起し、秀夫さんが入口でスパイと何か云っている間に、ガリ板を手早く便所の中に投げ捨て、しまった。そして「サア、何処どこツからでも見て下さい！」と云つて、特高を案内したそうである。お前には、「サア、何処どこからでも見て下さい！」と云つたあのお母さんを直ぐ思い出すことが出来るね。スパイの連中が歸りがけにストローヴのお礼を云つたら、「そツたらお礼ききたくもない。それよりお前さんらサツサとこの商売をやめねば、後で碌ろくでもないことになるよ。」と云つたので、秀夫さんまでそれには笑つてしまったそう

だ。——ところが、秀夫さんの方が何かと云うのに舌が口にねばり、乾いたせき払いをして、何時いつもとちがった声を出し、下り口に立っても、お母さんが靴を出してやらないと妙にウロ／＼したり、帽子をかぶるのを忘れて、あわてたそうよ。

夜が明けてから、お前が可愛がって運動に入れてやった「中島鉄工所」の上田のところへ、母が出掛けて行つたの。若しも上田の進ちゃんまでやられたとすれば、事件としても只事でない事が分るし、又若もしまだやって来ていないとすれば、始末しなければならぬ事もあるだろうし、直すぐ知らせなければならぬ人にも知らせることが出来ると思つたからである。争われないものだ、お前の母は今ではこういうことに気付くのだ。——母がたずねて

行くと、薄暗い家の奥の方で、進ちゃんのお母さんが髪をボウノ
とさせ、眼をギラ／＼と光らせて坐っていた。母が入ってきた
のを見ると、いきなり其処そこへ棒立になつて、「この野郎ツ！ 一
歩でも入つてみやがれ、たゝつき殺すぞ！」と大声で叫んだそう
だ。母は何が何んだか、わけが分らず、「あのね……………」と云
い出すと、「畜生ツ！ 入るか!？」と云つて、そこにあつたスト
ーヴを掻かき廻まわす鉄のデレツキを振りあげた。母は真青になつて帰
つてきた。

この冬は本当に寒かつたの。留置場でもストーヴの側の監房は
少しはよかつたが、そうでない処ところは坐つてその上に毛布をかけて

いても、膝がシン／＼と冷たくなる。朝眼をさますと、皆の寝ている起伏の上に雪が一杯ふりかゝっている。ので吃驚びっくりするが、それは雪が吹きこんできたのではなくて、（それもあつたが）夜中に空気中に残っているありとあらゆる湿気がみんな霜に還元されるのである。なかのものは次々と凍傷を起して行つた。

お前の母ばかりでなしに、沢山たくさんの母たちが毎日のように警察に出掛けて行つたが、母はそこでよく子供を負おんぶした労働者風のおかみさんと会つた。最初はどこの係りにやってくるのか分らなかつたが、そのうち特高室で待っているところへ、そのおかみさんが入つてきた。それで同じ事件の人だということが分つた。

——— 帰りに一緒になつて、母が色々なことを話そうと思ひ、お前

や妹の母だという事を知らせた。すると、急に眼をみはつて、マジくとしながら、「んじや、お前さんが伊藤のお母さんかね。」と、荒ツぽい浜言葉で云つて、「んか、んか」と独りひとうなずきをした。それはまるで人を見下げた、傲慢ごうまんな調子だった。そして帰りに一緒になることにしていたのに、そのおかみさんはさつさと自分だけ先きに帰って行つてしまった。背中の子供は頭が大きくて、首が細く、歩きたびにガクくと頭がどつちにも転ころんだ。

上田の進ちゃんのお母アは、とうとう気が狂つたとみんなが云つた。お前がこつちにいた時知っているだろう、「役所バカ」と云つて、五十恰好の女が何時でも決まつた時間に、市役所とか、税務署とか、裁判所とか、銀行とか、そんな建物だけを廻つて歩

いて、「わが夫様は米穀何百俵を詐欺横領しましたという——」
きまつた始まりで、御詠歌のように云つて歩く「バカ」のいたの
を。ところが上田のお母アは、午後の三時になると、きまつて特
高室に出掛けて行つて、キャンキャンした大声でケイサツを馬鹿
呼ばりし、自分の息子を賞め、こんなことになつたのは他人にだ
まされたんだと云い、息子をとられて、これからどう暮して行く
んだ——それだけの事を文句も順序も同じに繰り返かえして、進は
腕のいゝ旋盤工で、これからの位出世をするのか分らない大事
な一人息子だからと云つて、大きな蒲団を運んできたり、暖かい
煮物の丼を大事そうに両手にかゝえて持つてきたり、それを特高
が拒ばもうがどうが、がなり立てゝ、無理矢理置いて行く。そし

て次の日には又マントを持ってきたり、手袋を持ってきたりする。特高室は上田のお母アの持つてくるもので一杯になつてしまった。警察では「又、氣狂いババが来た」といつて取り合わなかつた。それでもお母アは平氣だった。——あまりやかましいので、一度特高室で進と面会をさしてやつた。息子が係りの刑事に連れられて、入つてきたのを見るや否や、いきなり大声で「こん畜生！この親不孝の馬鹿野郎奴め！」と怒鳴りつけた。刑事の方がかえつて面喰らつて、「まあく、こういう時にはそれ一人息子だ。優やさしい言葉の一つ位はかけてやるもんだよ。」すると、くるりと向き直つて「えッ、お前さんなんて黙つてけずかれ！」とがなりかえした。ところが、その進が右手一杯にホウ帯をしているのを見

付けて、「どうしたんだ？」ときいた。「ん、しもやけだ。」と進が返事をする、見ている間に、お母アの眼がつり上がって、薄い唇がピリピリと顫ふるえ出した。「さ、警察の人ツ！ どうしてくれるんだ？ 人民を保護するとか何ンとか、口ではうまい事云って、この大事な息子の身体をこんなことにしてしまつて、どうする積つもりなんだツ！ さツ！」特高たちは、あ、又始まつたと云つて、自分たちの仕事にとりかゝつて、見向きもしなかつた。

検挙は十二月一日から少しの手ゆるみもしないで続いた。そつちにいるお前はおかしく思うだろうが、残された人達が「戦旗」の配布網を守つて、飽く迄も活動していた。然し、とう／＼持つ

て行き処のなくなったその人達は最後に、重要書類と一緒に家へ持ってきた。もうやられているので、二度も「ガサ」が無いだろうと云うのだ。六十に近いお前のお母はそれをちアんと引受けた。淋しいだろうと云うので、泊りにきていた親類の佐野さんや吉本さんが、重ね重ねのことなので、強こうに反対した。だが、お前の母は、「この仕事をしている人達は死んでも場所のことなどは云わないものだから、少しも心配要らない。」と云った。

山崎のガラ／＼お母さんが時々元気をつけに、やってきてくれたが、このお母さんの前だと、お互の息子や娘のことを話して、お前の母はまるで人が変わったようにポロ／＼涙を流した。山崎のお母さんというのは相当教育のある人で、息子たちのしている事

を、気持からばかりでなしに、ちアんとした筋道を通しても知っていた。「息子が正しい理窟から死んでも自分の仕事をやめないと分ったら、親がその仕事の邪魔をするのが間違で——どうしてもやらせたくなかったら、殺せばいゝんでね。」そんな風に何時でも云っていた。それに生来のガラ／＼が手伝っていたわけである。山崎のお母さんは警察に行っても、ガン／＼怒鳴らなかつたが、自分の云い出したことは一步も引かなかつたし、それを条理の上からジリ／＼やうて行つた。ケイサツでは上田のお母アはちつとも苦手でなかつたが、この山崎のお母さんには一目おいていたらしい。山崎のお母さんに比らべると、お前の母は小学校にも行つたことがないし、小さい時から野良に出て働かせられたし、

土方部屋のトロツコに乗って働いたこともある純粹の貧農だったが、貧乏人であればあるほど、一方では自分の息子だけは立派に育て、楽をしたいと考える、それに貧乏に対して反撥する前に、貧乏に対してどうしても慣れあいになり勝なのだね。だから、プロレタリアの解放のために仕事をやって行こうとするお前たちのことが分るのだが、何んだか自分の楽しい未来のもくろみが、そのためにガタ／＼と崩されて行くのを見ていることが出来ないのだよ。こんな気持をもっているから、警察ではお前の母が一番おとなしくて（！）しっかりしているというので「評判が良い」の。——今度のことでも、お前の母の表面の動作ではなくてその心持の裏に入りこんでみたら、それは只事ではないということとはよく

分る。だから頼りになりそうな山崎のお母さんと話し込むと、正体がないほど弱くなってしまふの。

窪田が二十日程して釈放された。すると、直ぐ家へやって来てこんなに大衆的にやられている時に、遺族のものたちをバラクにして置いては悪いと云うので、即刻何処かの家を借りて、皆が集まり、お茶でも飲みながらお互いに元気をつけ合ったり、親密な気持を取り交わしたり、これからの連絡や対策や陳情、そういう事について話し合おうということになった。皆も賛成だった。窪田さんは山崎のお母さんの家にして、日と時間を決めて帰って行った。——こんなに弾圧が強く、全部の組織が壊滅してしまっ

たとき、この遺族のお茶の集まりだつて又新しく仕事をやって行く何かの足場になるのではないか、さすがしつかりものの窪田さんがそんな風に考えてのことらしいの。

その日は十人位の母たちや細君が集まった。ちつとも知らない顔の人もいたが、引張られて行つたときのことや、面会に行つたとき息子たちのことで、すぐ話はずんで行つた。お前の母はそういう話の一つ一つに涙ぐんでいた。誰が話すことも、それは誰にとつてもみんな自分のことだった。山崎のお母さんは林檎りんごや蜜柑かんを皿に一杯盛つて出した。母が何時か特高室で会つたことのある子供を負んぶしていたおかみさんが、その蜜柑の一つを太い無骨な指でむいていたが、ひとりごと 独言のように、「中にいるうちのお

ど（夫のこと）に一つでも、こんな蜜柑を食わせてやりたい……！」と云つて、グズリと鼻をすゝり上げた。お前の母はこの前の様子とまるで異う態度にびつくりした。——と、この時今まで一口も云わずにいた上田のお母アが、皆が吃驚するような大きな声で一氣にしゃべり出した。「んだとも！ なア大川のおかみさん！ おれ何時か云つてやろう、云つてやろうと思つて待つていたんだが、お前さんとこの働き手や俺ンとこの一人息子をこつたら事にしてしまったのは、この」と云つて、お前の母を突き殺すでもするよう指差しながら、「この伊藤のあんさんのお蔭なんだ。あんさんがこつちにいたとき、よく息子の進とこさ遊ぶに来る来ると思つてたら、碌でもないことば教えて、引張りこみやがった

だ。腕のいゝ旋盤工だから、んでなかつたら、どんどん日給もあがつて、えゝ給料取りになつていたんだ。」——それは他の人もソツと持つていた気持だったので、室の中が急に、今迄とは変わったものになった。——「そればかりで無いんだ。この前警察から出てくると、俺もう吃驚してしまつた。ケイサツの裏口から頭一杯にホウ帯した進が巡査に連れられて出てくるんでないか。俺どうしたんだと夢中になつて、ガナつた。進奴めこつちば向いて、立ち止まつたが、しばらくキョトンとしてるんだ。こら、お母アだ！ と云うと、ようやく分つたのか、笑つたよ。ところが、ついていた巡査が立ち止まつちやいかんと云つて、待たしていた自動車の中に無理矢理押し込んでしまつたんだ。俺くやしかつたよ！

それから俺毎日ケイサツさ行つて、お前えら俺の息子ば殴ぐつ
たんだべ。さ、いッくらでも殴ぐれ、今お前えらば訴えてやるか
らッて怒鳴つてやった。んでも、何んぼしても面会ば許さないん
だ。それから裁判所へ廻つてから面会させてもらったら、その時
はホウ帯ば外していたがどうしたんだと訊いたら、看守の方ば見
て、耳が悪かつたんだと云うんだ。俺、うそこさツて云つてやつ
た。それから話していると、まるでトツチンかんのことばかり云
うんでないか。お前何時頃出れるか分らないかときいたら、ハイ
お母さん有難うございますツて云うんだよ。俺びっくりしてしま
つた。これ、進や、お前頭悪くしたんでないかツて云つたら、お
母アの方ば見もしないで、窓の方ば見たり、自分の爪ば見たりし

て、ニヤ／＼と笑うんだ……。」「そこまで来ると、上田の母は声をあげて泣き出した。そして、しやつくり／＼云った、「ケイサツが進ばバカにするほど殴ぐったんだ。俺ケイサツば訴えてやる。キット訴えてやる！ それに、」と云って、又お前の母をにらみながら、「俺の息子に若しものことがあつたら、お前さんの息子ばうらんで、うらんで、うらみ殺してやる！」——窪田や山崎のお母さんが中に立って、上田の母にわけを云い、理をつくして話してやったが、そんな事は耳にも入れないのだ。「ドロ棒したとか、人をゴマ化したとか、そんなことならまだいゝ。警察で云っていたよ、進らのしたことはこの日本の国をブツ倒そうとしている恐しい罪だつて、それをみんなお前さんの息子や山崎の息子な

どからだまされてやったんだってよ！」——これでも分つたが、警察では、お前の母や山崎のお母さんなどには、お前さん達の息子のしたことはドロ棒したとか、強姦ごうかんしたとかいう罪とちがつて何も恥はずかしがることはないと云つていながら、労働者のおかみさん達には、それは世の中で一番恐ろしい罪で、みんな学問のある悪者にだまされてやったんだと云つて、（殊にこつちでは）運動をやっているもの達の間には離間策を講じているのだ。窪田さんや条理の分つた山崎のお母さんたちが、一生ケン命に、だまされるどころか、丁度その反対で、上田や大川たちの搾取の生活を解放するために、伊藤や山崎などが先頭に立つて、一身を犠牲にしてやっているのだと云つてきかせても、一向にきゝ入れないのだ。

——大川のおかみさんは、私はだまされたという程にも思わないが、警察に入れば直ぐその日から食えなくなるような夫を、何んだって引き入れてくれたかと、そればかり口惜くやしいと云うのだった。中にいる夫に蜜柑どころか、この寒さに足袋たびさえ入れてやることが出来ない。ところが、お前さん方になると、入った人が出てくるまでどうにか食って行けるだろうし、色んなものが充分差入も出来るから羨うらやましい。面会に行ったら、食えなくなったら仲間の人に頼んでみれ、それも長続きしなかったら、親類のところへ追い出される迄こ転ころげこんで居れ、それも駄目になったら、男さ身体売ったってえ、と云うんです。そして手の甲を蟹はさみの鉗はさみのように赤く大きくふくれ上らせているの。大川のおかみさんも終

いには泣き出してしまった。この前見たときよりも、赤坊はもつと頭が大きく、首がもつと細くなつて見えた。そして赤坊らしくなく始終眉をしかめていた。

公判はこの九月から始まつた。公判のことについては、その大體はもうお前も知っていることだから、詳しくは書かない。「共產党被告中の紅一点！」というので、毎日新聞がお前の妹のことをデカくと書いた。検事の求刑は山崎が三年、お前の妹が二年半、上田と大川は二年だった。それで、第一審の判決は大體の想像では、みんな半年位ずつ減つて、上田と大川は執行猶予になるだろうということだった。上田のお母アはすっかり喜んで、お前

の母にもあまりひどい事は云わなくなってきた。

判決の日に、みんな隣の地方裁判所のあるH市まで出掛けて行つた。——裁判長が判決を下す前に、「被告は今後どういう考か？ これからも共産主義を信奉して運動を続けて行く積りか、それとも改心して、このような誤つた運動をやめようと思つているか？」と訊きく。それによつて、判決が決まるわけである。そこへ来ると、傍聴に来ているどの母たちも首をのばして、耳をすました。

そつちから派遣されてきたオルグの、懲役五年を求刑されていた黒田という人は、立ち上つて、「裁判長がそのような問いを發すること自体が、われ／＼****を****するものである。*

****というものは後で考えていて間違っていたから****するとうようなものではないのだ。それは****されている労働者農民が、その****の****から****を****するための****なものなのだ。われ／＼は****もこの****を****ものではないことを、全われ／＼同志を代表して云つておく。」と叫んだ。この時、傍聴していた若い男が拍手をして、法廷の外へ引ずり出された。「他人のことまで云わなくてもい／＼」裁判長はそう云つて、次に山崎に同じ質問を発した。山崎は立ち上がると、しばらくモジ／＼していたが、低い声で裁判長の方に向つて何か云つた。裁判長は白い髭ひげを噛みながら、「本当にやめる心積つもりか？」と訊きかえした。「そうです、考えるところがあつて……。」山崎は頭

を伏せたまゝブツ／＼と云った。今まで眼をみはり首をのばしてきいていた山崎のお母さんはガクリと首を胸の前に落してしまった。そしてお前の母にも誰にもものを云わずに、外へ出て行ってしまった。お前の母はオヤと思つて振りかえると、その眼には涙が一杯にたまつていた。上田のお母アは自分のことのように喜んだ。「山崎の息子さんは執行猶予で出るよ！」——次はお前の妹だ。「私は今でもちつとも変りません。*****心積りです。」とはつきりと答えた。裁判長は苦りきつた顔をした。妹はそして椅子に坐る拍子に、何故か振りかえつて、お母さんの顔をちらツと見た。母は後で、その時はあ——あ、失敗しまつたと思つたと、元氣のない顔をして云つていた。横に坐つていた上田の

母が、「まア、まア、あんとこの娘さんにもあきれたもんだ」と、母に云った。「お前さんも心配の絶えない人だ!」、そう云われて、お前の母は思わず「本当に……!」と云った。そして母は涙を一生ケン命こらえていたそうである、それからようやくのこと、
「矢張り仕方がないでしょう。」と云った。

上田の進さんの番になると、お母アは鼻をびく／＼さした。骨組の太い上田が立ち上がると、いきなり、「われ／＼の同志であり、先輩である山崎君の*****に私は**を*****ものである。もはや山崎は同志でもなく、先輩でもない!」と前置きをして、自分は山崎のように学問もないが、私自身が*****いる
*****として、*****この*****積りだと

云った。「えゝ？」上田のお母アは突然大声をあげて叫んだ、「こら、進！ お前えお母アは忘れたのか？——あ、あ——この野郎！ 畜生！」そして立ち上がってしまった。廷丁や巡査が馳かけつけて来て、大声で叫んでいる上田のお母アを法廷の外へ連れ出してしまった。上田は然し振りかえらなかつた。だが、後から見ると、頭を深く深く、垂れていた。

最後は大川だつた。彼は何べんうながされても、なかなか云わなかつたが、自分の家あまり困つているので、外へ出たら運動をやめて働いて行きたいと云つた。大川は港湾労働者で、仲仕をしていた。おかみさんはそれを聞くと、お前の母に少し気兼ねねしたように、抱いていた自分の子供に頬ほおずりをした。

窪田さんはこう云っているの。——監獄^{なか}では大体にやっぱり労働者出身のものが、*****して、*****ている。ところが、外^{そと}では丁度その反対になっている。これはどうしても直さなければならぬ。お前は今運動が一番進んでいる中心地にいる。今度はこつちのことをどう考えるか、お前の手紙を待っている。

(一九三一・一〇・一一。*印は発表誌での伏字)

青空文庫情報

底本：「工場細胞」新日本文庫、新日本出版

1978（昭和53）年2月25日初版

初出：「改造」改造社

1931（昭和6）年11月号

※疑問箇所の確認にあたっては、「定本 小林多喜二全集 第六巻」新日本出版社、1968（昭和43）年6月30日を参照しました。

入力：細見祐司

校正：富田倫生

2004年11月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

母たち

小林多喜二

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>